＜幼稚園教育＞

幼児一人一人の発達に応じる生活のあり方についての実践的研究

―― 保育記録の整理と活用に着目して ――

糸満市立兼城幼稚園教頭　又　吉　ノリ子

目　　次

Ⅰ　テーマ設定の理由 …… 11

Ⅱ　研究の仮説 …… 11

Ⅲ　研究全体構想図 …… 12

Ⅳ　研究の内容 …… 12

1　幼児一人一人の発達に応じる生活 …… 12

2　一人一人に応じる発達理解 …… 13
(1)　0歳から入園までの先行発達 …… 13
(2)　幼児の発達の特性 …… 13

3　一人一人の発達に応じる援助のために …… 13
(1)　発達観 …… 13
(2)　発達を促す …… 13
(3)　発達の視点としての領域 …… 14
(4)　発達の道筋 …… 14
(5)　援助にあたっての基本的な姿勢 …… 15
(6)　保育の展開と援助 …… 15

4　保育記録の整理と活用 …… 15

Ⅴ　事例を通して発達と援助を考える …… 16
1　幼児の思いに添う …… 16
2　発達の課題を考える …… 16
3　発達の道筋と援助 …… 17

Ⅵ　研究の成果と今後の課題 …… 20
1　成果 …… 20
2　今後の課題 …… 20

＜幼稚園教育＞

幼児一人一人の発達に応じる生活のあり方についての実践的研究

―― 保育記録の整理と活用に着目して ――

糸満市立兼城幼稚園教頭　又　吉　ノリ子

Ⅰ　テーマ設定の理由

近年、生活の画一化、規格化が進み、一人一人の幼児を個性豊かに育てることの難しさがいわれるようになってきた。また、幼児の成長、発達は「できること」や「速さ」が判断基準であるかのように受け取られている。そのことから、子供たちはある地点に早くたどりつくことを求められ、自分らしく考えたり、試したりしながら成長する余裕を奪われてはいないだろうか。

そうした中、平成元年幼稚園教育要領が改定され、「一人一人のよさ」や「その子らしさ」を大切にした保育理念が示された。幼稚園教育指導書においても「一人一人の幼児の発達の特性やその幼児らしい行動の仕方や考え方などを理解して、それぞれの特性や課題に応じた指導を行うことを重視しなければならない」とある。幼稚園教育の主軸は“一人一人の発達の姿”であり、“その子らしさ”を発揮しつつ育って行く過程を大切にし、望ましい方向に発達を促すという幼児期にふさわしい教育の実現がなされなければならない。

実際に幼稚園では、一人一人の発達に応じた保育を目指し、次のような保育実践を行っている。たとえば、長縄を取り入れた生活では、先行経験からすぐ跳び始める子に対しては、保育者も一緒に跳べることの楽しさを共有している。縄に初めて出会う子に対しては、縄にかかわる様子を見守り、走り回ったり、友達の跳ぶのをじって見ている様子に寄り添いながら、遊びに広がりや深まりを期待している。そうした生活を共にしていると、一つのことが身につくには、その過程において、時期や身につき方もそれぞれであることがわかる。保育者が幼児一人一人の発達の個人差を受け止め、適切な援助をすることで自ら伸びようとする力を助長することができるのではないだろうか。

一方、そうした日々の保育を振り返ってみると、

① 興味や関心に基づき、主体的にかかわっているのだからと“手をこまねいたり”“ただ見守ったり”幼児を主体にすることを意識し過ぎて、援助の程度がつかめない。

② 保育者が全面に出過ぎ、遊びが盛り上がることに満足していないか。

③ 発達に必要な経験は、興味・関心に支えられた経験だけでよいか。

など、幼児一人一人の発達に応じる生活のあり方について考えさせられることが多い。

このことは、幼児の発達をどのように理解し、具体的にどのようにかかわるかということの理解が不十分であることに起因する。しかし、幼児の発達はいくつもの側面が複雑に絡み合い、捉えることは容易ではない。また、より良い保育を行うために、保育の記録を積み重ねているが、次の指導に生かされるような発達を捉えているとはいい難い。

そこで、これらの反省の上に立ち、幼児一人一人の発達に応じる生活のあり方のためには、幼児と生活を共にするありのままの記録の中に実践的に幼児の発達を理解し、援助のあり方を明らかにすることであると考えている。そうすることが幼児一人一人の望ましい発達を助長し、充実した園生活になるものと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ　研究の仮説

1　幼児の生活をまるごと受け止め、幼児と共に創り出す生活で、幼児の発達の実情と課題に即した援助を行えば、幼児一人一人の発達が促され、充実した園生活が送れるであろう。

2　保育の記録を通して、行為の意味をていねいに読み取れば、幼児理解と次の保育の計画を創り出す手掛かりになり、幼児一人一人の発達に応じる援助ができるであろう。

Ⅲ　研究全体構想図

幼稚園教育の
めざすもの

（生きる力の
基礎となる）

心情・意欲・態度

幼稚園教育の目標

1　健康、安全で幸福な生活のための基本的な生活習慣・態度を育て健全な心身の基礎を培う
2　人への愛情や信頼感を育て、自立と協同の態度及び道徳性の芽生えを培う
3　自然等の身近かな事象への興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培う
4　日常生活のなかで言葉に対する興味や関心を育て、喜んで話したり聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養う
5　多様な体験を通じて豊かな感性を育て創造性を豊かにする

幼稚園教育の基本

※ 環境を通した教育

1　主体的活動を促し、ふさわしい生活の展開
2　遊びを通しての総合的な指導
3　一人一人の発達の特性に応じた教育

教育課程の編成

教育課題

本園の教育目標

じょうぶな子　やさしい子　かんがえる子　ねばり強く頑張る子

幼・家の連携
生活する姿の共通理解
共に支え合う環境
生活経験の共有

【研究テーマ】
幼児一人一人の発達に応じる生活の在り方についての実践的研究
― 保育記録の整理と活用に着目して ―

【研究の仮説】
1　幼児の生活をまるごと受け止め、幼児と共に創り出す生活で、幼児の発達の実情と課題に即した援助を行えば幼児一人一人の発達が促され充実した園生活が送れるであろう。
2　保育記録を通して、行為の意味をていねいに読み取れば、幼児理解と次の保育を作り出す手掛かりになり、発達に応じた援助ができるであろう。

研究への具体的なアプローチ

幼児一人一人の発達に応じる生活とは
1　一人一人に応じる発達理解
・先行発達　・幼児の発達の特性
2　一人一人に応じる援助のために
・発達観　・発達を促す　・視点としての領域
・発達の道筋　・援助にあたっての基本的な姿勢
・保育の展開と援助
3　保育記録の整理と活用

⇔

文献・保育記録

⇔

1　記録の工夫
2　発達記録の分析
（実践的に援助の在り方を探る）
3　具体的な援助

Ⅳ　研究の内容

1　幼児一人一人の発達に応じる生活とは

幼稚園教育を行なう上で特に留意したいことは、幼児の「今」の姿をありのままに捉えるということである。幼児期は体験を通して発達する。この体験の違いが一人一人の発達の個人差を大きくしている。入園までの生活のなかで、どのような経験を積んで来たかによって園生活への入り方、友達とのかかわり方、興味関心等、一人一人に違いがある。幼児一人一人の望ましい発達のためには、この体験からくる個人差の大きいことを十分に理解すると共に、発達のテンポや方向にも個人差があるということを理解することが重要である。また、そのことは自ずと幼児一人一人の望ましい発達に必要な経験もそれぞれ異なるという観点に立ち、幼児と共に充実した園生活を創って行くことであると考える。

2　一人一人に応じる発達理解

(1)　0歳から入園までの先行発達

①　0歳から1歳半まで

母親との関係によって「信頼感」が獲得される。幼児は、この信頼感を抱ける母親を外界の絆として安定し、外界を安心して受け入れることができるようになる。

②　1歳半から3歳頃まで

幼児はこの時期に、離乳、歩行、言語の使用、排泄習慣が身についてくる。このことが自分のことは「自分でするんだ」という自立感を獲得して行くことになる。なお、自立感は信頼感を基礎にして、その獲得がスムーズに行われる。

（離乳）　離乳によって授乳者への全面的な依存から解放されるきっかけが得られるということは、幼児にとって重要な意味を持っている。しかし、授乳を媒介とした温かい感情交流のない離乳は、母親への信頼感が阻害され、母親に依存しないような生き方をするようになり、社会化が妨げられる。

（歩行）　歩行は幼児の外界への行動範囲を拡大して行くだけでなく、自分を他との関係において自覚させていく契機になる。

（言語の使用）　言葉を発するようになると、幼児は自分の要求や感情を相手に伝え、自分の行動を促したり、抑制したりすることができるようになる。

（排泄習慣の獲得）　排泄の習慣が身につくということは、幼児が自分の体を管理することができるようになり始めるという意味を持つ。それが身につくと、自分の能力への信頼が持て、自発的に行動するようになり、社会性発達の素地が築かれる。

③　3歳～4歳

3歳から就学前までは積極性の獲得が行われる時期である。3歳後半になると、思う存分体を動かし、次々と新しいことをやりたがるようになり、自分以外の他児と共有する世界で遊び始める。自我に目覚め、自己主張をしたり自分の思いを伸び伸びと表現する。自分一人ではない外界の刺激を感じ取りながら様々な側面が急速に発達する。

(2)　幼児期の発達の特性

①　身体が著しく発育すると共に、運動機能が急速に発達する。

②　大人への依存を基盤としつつ、自立へ向かう時期である。

③　生活体験から得た自分なりのイメージを基に物事を受け止めていく。

④　信頼やあこがれをもっているものの模倣をしたり、取り入れたり、同一化の時期である。

3　一人一人の発達に応じる援助のために

(1)　発達観

①　発達とは、幼児が能動性を発揮して環境とかかわりあう中で、必要な能力や態度を生活の中で獲得して行く過程である。

②　幼児は周囲の環境に自分から能動的に働きかけようとする力を持っている。

③　幼児期は、能動性を十分に発揮することによって、発達に必要な経験を自ら獲得して行くことが大切である。

④　幼児は、「育てられる」存在ではなく、幼児同士で、またかかわりあう大人と相互に「育ち合って行く」存在である。

⑤　発達を理解するときは、その子の変化だけに焦点を当てないで、その子のおかれている状況のなかで判断することが大切である。

(2)　発達を促す

発達を促すには、日々の生活を充実させることが基本となる。そのためには、保育者との信頼関係を基盤に能動性が十分に発揮できるようにすること、また、発達に応じた環境からの刺激が重要である。

幼児の環境とのかかわり合いによる発達は下図の通りであると捉えることができる。

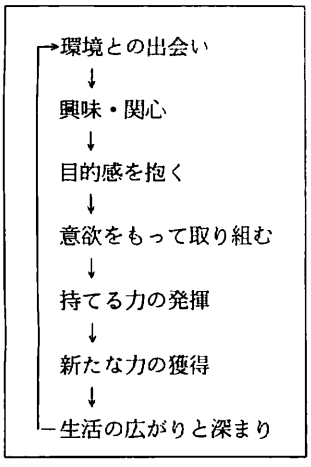


図1　発達が促されて行く過程

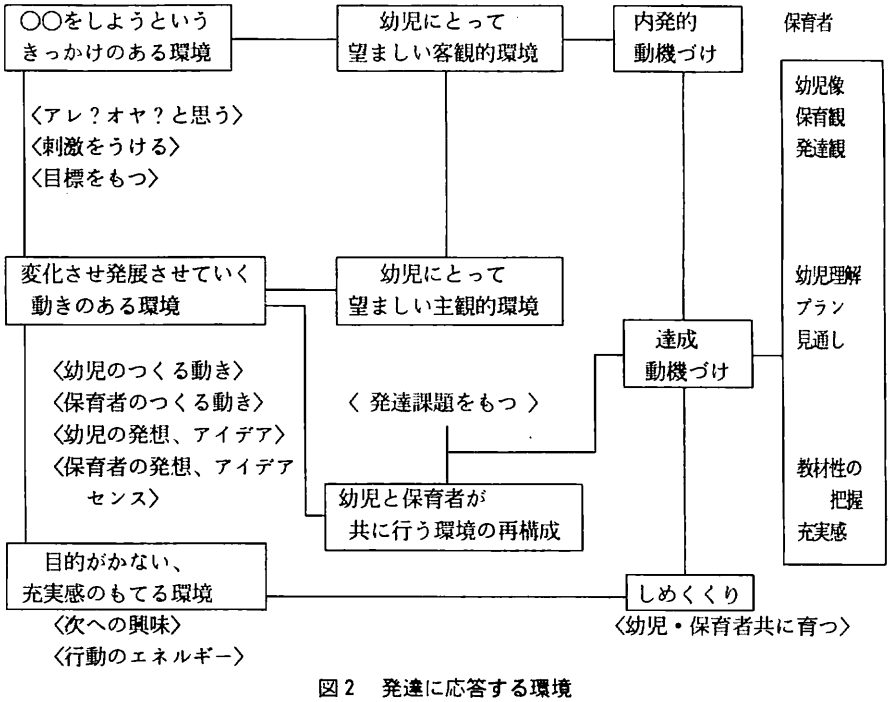


図2　発達に応答する環境

(3)　発達の視点としての領域

幼児の発達を観る窓口として5つの領域がある。すなわち「健康」「環境」「人間関係」「言葉」「表現」である。領域に示されているねらい、内容は幼児が幼稚園修了までに保育者が指導し、幼児が身につけることが望ましいとされるように、幼児期の発達に必要な経験と言える。発達は、まるごとの人間発達であり相互に絡み合いながら促される。

また、発達は結果をみることではなく、そこに至る過程を知ることであり、どの窓口からみても〈幼児の全体像〉をみることになる。

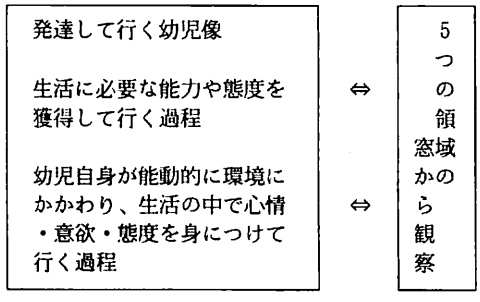


図3　領域と発達の関係

5つの領域は、ねらいや内容を加味し、右図のように8つの視点に分けることができる。

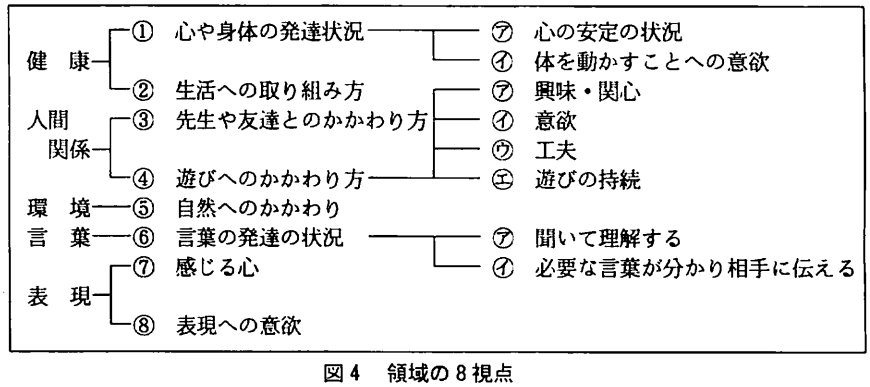


図4　領域の8視点

(4)　発達の道筋

発達という場合にすぐに頭に浮かぶのが発達段階である。「4歳児だから……」「5歳児だから……」という年齢で区分された発達平均である。しかし、それは発達をみる一つの目安にはなるが、その基となるプロセスが見失われることになれば、かえって弊害が生じる。発達は一人一人が自分なりの道筋を固めて行くところにある。そのために、次のことを理解したい。

① 幼児の発達は、画一的でなくいくつもの道筋がある。

② 発達の側面は、停滞したり、急激に伸びたり、一つの側面が伸びることによって他の側面が促されたりする。

③ 発達する姿は、長い期間としてみれば共通性や順序性が見られるが、短い期間で見るといろいろな道筋を歩んでいる。

④　発達の道筋には節目がある。停滞したり、低迷したりしているように見えるときである。しかし、こうした時期は、その子なりに貯め込んでいるものがあり、その時期を乗り越えると急激に発達することもある。

(5)　援助にあたっての基本的な姿勢

①　子どもへの信頼……幼児は信頼され任されると真剣に生活し、けなげにも自立しようと力を出し切るものである。

②　温かいかかわり……安心して自分の気持ちが発揮できるためには、温かく受け入れられることである。

③　生きる力の基礎作り　・何ができたかではなく、どう学んだかを大切にする。
・一見マイナスに見えることでも、その幼児にとっては意味のあることとして価値づけ、ていねいにかかわる。
・自分の意志でやり遂げる喜び、自ら学ぶ喜び、仲間と知恵を出し合う喜び、よい生活をする喜びを体験を通して学ばせる。

④　一人一人の尊重……一人一人の違いを認め、持ち味を生かし、その時期を失わない。

⑤　場の確保　……一人一人の違いに応じるためには「たっぷりの時間」「思いっきり活動できる空間」「共感し、共に生活を創る仲間や保育者」が必要である。

(6)　保育の展開と援助

①　その時期に環境とかかわって求めてくると思われることを予想する。

②　幼児がしだいに自分たちで生活を展開できるような方向に援助する。

③　保育者自身のかかわり方や動き方をあらかじめ考えておく。

④　一人一人の発達に応じ、かかわり方を変える。

⑤　信頼関係を基にかかわれるよう、十分にコミュニケートする。

⑥　援助のあり方の方向性は、時期や個々の状態により、柔軟に判断する。

4　保育記録の整理と活用

一人一人の幼児の発達に応じた生活を営むためには、幼児を理解することが最も大切である。幼児の生活する姿を捉え、今、何が育とうとしているか、またそれをどの方向へ伸ばしていきたいかという保育者の願い（ねらい）を一人一人の幼児にもってこそ、その子にあった援助が生まれる。

そのために記録を取ることは重要である。理解しようと取り続けることが、結果的に幼児理解を深めることになる。何のために記録するのか、絶えず必要感を明確に捉えて、実態に即しながら記録することが大切である。

(1)　記録の工夫

①あらかじめ記録の視点に合うような、様式を準備して書き込みやすいようにする。

②記録の視点

〈幼児の遊びについて〉

・遊びの何に興味・関心があるのか。

・この遊びで経験していることは何か。

・どんなことに問題やつまづきがあるか。（遊びの充実・友達関係）

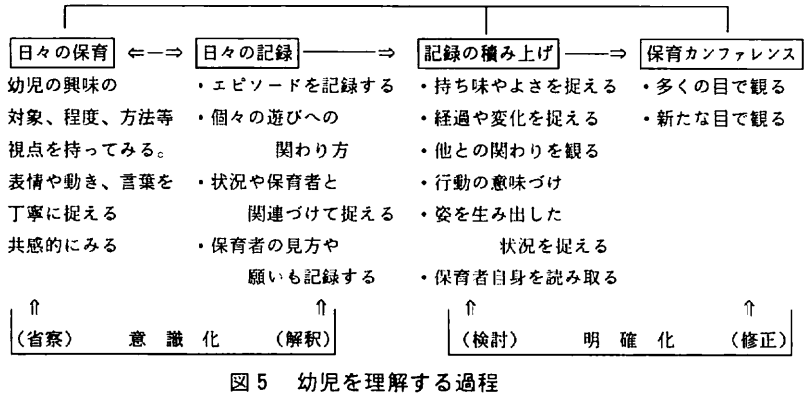


図5　幼児を理解する過程

〈環境構成について〉

・どのように取り組んだか。　・再構成をなぜしたか。その結果はどうか。

〈保育者の援助について〉

・なぜこのような援助をしたか。

・援助したことで幼児はどのような姿をみせたか。

〈ねらい、内容について〉

・実際の幼児の生活する姿に合わせてみて、適切であったか。

(2) 記録から何を読み取るか

記録から何を読み取るかが保育を改善するうえで重要な意味を持つ。記録の中で次のことを読み取ることがより良い保育を生み出すことになる。

① 一人一人の幼児の生活の変化を読み取る。

② 幼児の姿を生み出した状況を捉える。

③ 保育者自身を読み取る。

V 事例を通して発達と援助を考える。

1 幼児の思いに添う

【事例 1】ぼく行くところがないのに……（5歳児 12月）

寒い日が続いている。砂場でT男、N男、Y男が遊んでいる。しかし、洋服が濡れて寒そうである。片付けの間際に「寒かったんじゃないの？」と声をかけた。T男が弱々しく「だってぼく行くところがないのに……」と答える。

午後になって、砂場にいらずにいられないT男たちの気持ちを保育者が理解しようと話し合い、そのことは決して即T男を他の店に入れてあげることではないことを確認する。

担任のM先生がT男と遊ぶことになった。M先生も寒い中、素足になっての砂遊びである。M先生のアイデアも加わり、海を作るために穴を掘り、黒いビニールを敷き、水が溜まるように……と、一生懸命である。できあがったときには、「先生、舟浮かべよう」と近くにあったホルトの葉を浮かべたり、「2階船だよ」と喜んだ。明日も遊べるようにと、船になるホルトの葉をていねいに片付けたり、ビニール袋を干している。「砂場楽しそうだったね」と声を掛けると、「うん明日も遊ぶんだよ。N男たちと約束した。先生も遊びたい？店のお客さんがいないときに来てね。僕たちも後で行くよ」と誇らしげに話す。

事例を通して学ぶために次の手順を踏んだ。

a） 幼児の生活をどう受け止めたか

b） 受け止めたことをもとに、どう援助したか

c） 援助したことで幼児の生活はどう変わったか

d） a，b，cをもとに、T男を支える援助のあり方を考える。

T男にとって、「僕行くところがないのに…」と砂場にいらずにいられない時と、「明日も遊ぶんだよ」と誇らしげに語るときとでは、明らかに育つものが違うと考えられる。前者は不安、不満、葛藤であり、後者は満足、充実である。一見自由に遊んでいるように見える幼児の遊びに不自由を感じ取り、幼児の思いに添うことで、幼児自身自らが充実した遊びを切り開いている。保育者の具体的な援助は、T男の言葉からその奥にある内面に気づき応えることである。

2 発達の課題を考える

【事例 2】連なり連なる （5歳児 6月○日 雨）

雨が降り、4人の男の子が階段を駆け上がり、廊下を走り回る。連なっているかどうかを常に確かめながら、振り向いては笑い、目を合わせては大声で笑う。いつの間にか仲間が増え、高いところや、テーブルの上を歩きスリリングになる。突然H子が大きな声で泣いた。「M先生が悪いんだ。K男たち怒らないからだよ。うるさいんだから。みんなだって外で遊べないけど我慢しているんだから……」という。

園生活にもようやく慣れてきたこの時期は、友達がつながり始めるときでもある。雨が降って外に出られないという環境が友達の動きにより興味を持たせたのだろう。遊びの先頭にいるR男と同じことをするというつながりの中で楽しんでいる。他愛のない走り回る遊びであるからこそ、一緒であることが

確かめやすい。暗黙のうちに目を合わせ、笑い、徐々に仲間が増えるこの遊びは「友達になりたい」幼児の思いをひとつにしてくれた。

しかし、一方でH子が大声で泣く。そこで初めてR男たちは“自分の楽しみが人の迷惑になっている”ことを知らされる。雨という環境、遊びたいという思い、他の子の迷惑といういろいろな状況に直面し、R男たちは葛藤する。援助の工夫はこの状況を判断することである。

こんな幼児の姿に注目して		成長の根っこです
1 熱中して何度も取り組み、納得のいくまで遊んでいる 2 他の子がやっていることをそばでじっとみたりその時はやらなくてもあとで同じことを始めようとする	⇒	どうして？ それから？ 必要な物は？ すごいね！
3 自分の気づきや発見を周りの子や保育者に伝える 4 今まで取り組まなかったことを、その子なりに自分から挑戦しようとしている 5 何かうまくいかなくて落ち込んでいる	⇒	こんなアイデアもあるよ

図6　発達の課題を捉える

3　発達の道筋と援助

【事例　3】　T男の事例にまなぶ

4　月
一旦部屋に入った後外へはほとんど裸足ででる。
他の子の間を少し触れるように走る。
高い塀の上を軽く身をこなして歩いている。
かかわる友達が一人いる。決まって降園間際になると「D男は？」と、求める。

5　月
4月の状態に加えて、幼稚園外に出るようになった。
最初のうちは、こっそり出ていたが、先生たちが一生懸命探しているのがわかると、今度は先生を十分に引き付けてから園外に出て行く。
車を確認しないで出て行くので危険である。看板を車道に出し、運転者に注意をお願いするが、看板は必ずどこかに隠してしまう。ただ面白がる。

6　月
朝、一通り園内を回り、他の子が部屋に入るころになると決まって水道の水に気持ち良さそうに打たれている。
他の子供達も水遊びが始まったが、ほとんどかかわらず一人である。カバンに着替えが入っており、帰る間際には表情と共に清々しい。裸であることをあまり気にしなく、他の子が「チンチン見える！」にも平気である。
着替えた後は、絵本の部屋で絵本を広げていることがある。

7　月
帰りの友達が増えた。D男に加え、A子、Y子、K子である。どちらからともなく誘い合っている。降園後、一緒に遊んでいるようで、家庭から「まだ帰っていませんが……？」と問い合わせがくる。

8　月　（夏休み）
絵本の貸し出しに一緒に暮らしているお姉さんと来る。
「絵本を借りに行くことを楽しみにしているんですよ」とのこと。

9　月
日によっては「おはようございます」とびっくりするような元気な声であいさつをし、登園してくる。暑い日は相変わらず水遊びが好きである。他の子に水をかけ、その場の騒然さを喜んでいる。
運動会に向けて、走る子が多くなった。T男も喜んで走り回るが、バトンを持ちリレーの形式になると、逆に走ったり、バトンの受け渡しまで並んで待てず、出番にさっと出られなかったりする。他の子から「先生……T男よもうー」と言われる。そのことが面白くないらしく、ぷいとその場を離れる。運動会があることは十分に意識しており、「ぼくのお父さんが見にくるよ」と練習にも熱が入っている。会話が増えてきた。エイサーは無心に踊る。

10　月
ドッチボールなどルールのある遊びが盛んになる。
T男はやる気は十分にあるが、ルールの理解ができなく仲間になれない事が多い。Y男が思いやってT男にボールを渡すが、それっきりになる。

11　月
部屋で街作りが始まり、友達に作ってもらった車を持ち「ブーブー」と走り回る。仲間意識があり、指示を待って紙を切ったり、支えたり、その場に長いこといる。片付けも一緒で、「あしたも遊ぼうな」と誘われている。
戸外のうんていで遊んでいる。こんなに長時間、一つのことに取り組むのは初めてである。回りの子が「T男すごい」「上手だね」「頑張れよ」に、にこにことはにかむ。

12　月
うんていを渡り切るようになった。がんばりがすごい。S子などが誰かれにともなく「T男すごいんだよ」を連発している。そのことがあってか、あれよあれよと竹馬も乗りこなすようになる。みんなと共通の遊びの中にいる実感が全身からあふれている。むしろ「教える？」と友達を誘っている。お店屋さんごっこでは、「ゲームセンターのおじさん」になり一生懸命に仲間の中にいる。

T男の経験を整理すると発達の道筋が見えてくる。

幼児は先行経験をベースに経験を積み重ねながら発達することを理解しながらも、手のかかる子として捉えた場合、それのみに目が行き、なぜ今の姿があるのかに思がいかないことが多い。

T男の事例を通して

① ゆっくりとしたテンポではあるが、着実に成長、発達している。「先生T男すごいんだよ」と友達に認められたT男の経験は、T男の発達にとって大事な経験であった。

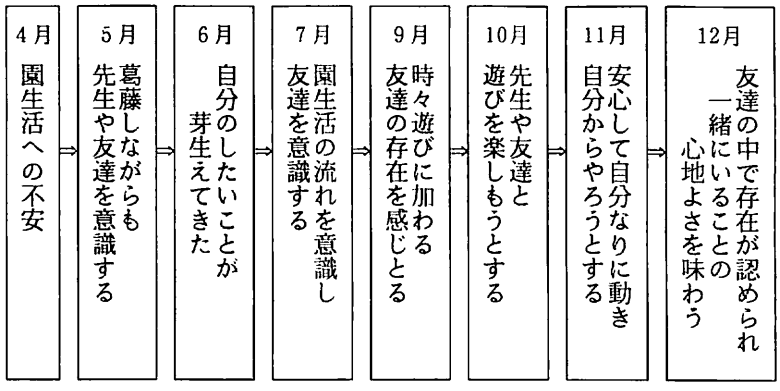


図7　T男の発達の道筋

② 発達を保障するとは、早急に先を急ぐことではない。幼児にとって今経験していることは必ず次の発達のために必要なことだという“発達し続ける幼児”の存在を信じることである。幼児の今をていねいに踏み固めるために、保育者が手を貸してやることではないだろうか。

③ 幼稚園の生活は、幼児と幼児、幼児と保育者が共に営むものである。T男の成長・発達を願うのなら、T男を取り巻く幼児の存在の大きさに気づき、集団が育つことがまたT男を育てることになるという相関関係の中で捉えて行かなければならない。T男の自信は、みんなから温かく見守られているという実感、相互に信頼しあい受け入れられているという情緒の安定でもある。

ここで、T男の発達を促した援助について考えてみたい。保育者が行なう具体的な援助には二つの方向がある。一つはT男を取り巻く園環境をどのように構成していくかということ（間接援助）と、もうひとつは保育者自身がT男にどのようにかかわっていくか（直接援助）ということである。T男自身が求めていることに応えることはもちろんであるが、発達を見通し、発達を揺さぶる援助ができるよう、予想をたてることも忘れてはならない。

T男の発達が促されて行く過程	環　　境	保育者のかかわり
1．新しい環境との出会い ・不安 ・不満	・楽しい雰囲気作り ・不安が和らぎ、安心して過ごせる場や物 ・生活の仕方を感じ取ったり、進めて行くのに必要な物	・全職員が温かい目で見守る。 ・声かけを多くする。 ・絶えず、近くで感じることのできる位置 ・危険に関しては、十分配慮をする。 ・手をつないだり、触ったり、スキンシップを多くする。
2．興味関心をもつ ・先生や友達を意識する。 ・園生活の流れを意識する	・園具、遊具等の安全への配慮 ・遊びのより所となる場や材料を揃える。 ・幼児同士つながって遊ぶ	・遊びに誘う。言葉かけを多くする。 ・ほんのささいなことでもほめる。 （D君のくつを大事そうにもっている） ・偶然を生かす。
3．目的感を抱く ・したい気持ちが芽生える	・水遊び場の準備、配慮 （場を清潔にする・材料、物の準備） ・みんなでやることの楽しさを感じ取れるような遊び	・遊びのきっかけをつくる。 ・やっていることを認め、一緒に喜ぶ。 ・T男の呼びかけを見逃さない。 ・「みてみてー」にていねいに付き合う。 ・トラブルの解消のしかた等、かかわり方を支える。
4．意欲をもって取り組む	・夏の暑さを感じて遊べるように、木陰などに遊び場を作る	・やろうとしていることを手伝う。 ・T男に内在しているイメージを受け止

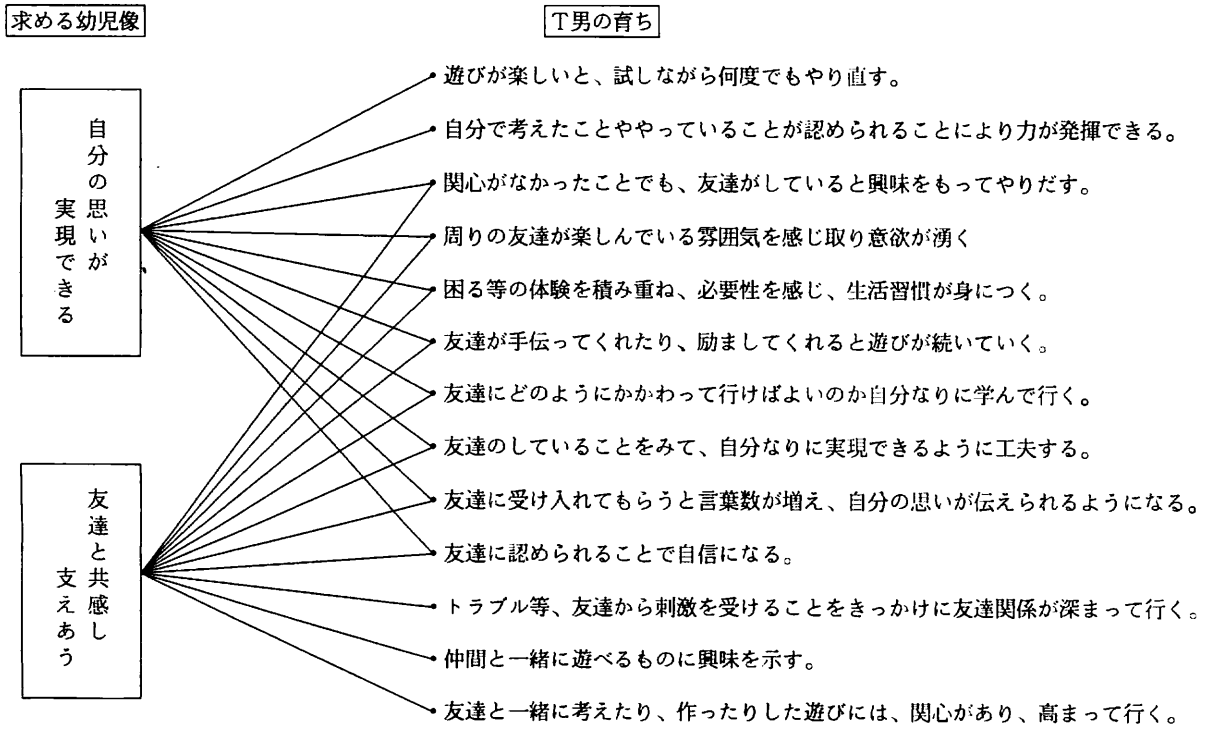
・遊びを楽しもうとする ・自分なりに動く	・持ち出しやすく、簡単に場を作っていけるゴザや園具 ・仲間意識が芽生えるような場や物 ・水遊び等、遊びに必要な物の準備 ・友達の動きによる刺激を感じ取らせる工夫	める。 ・遊べる場や物を具体的に提示する。 動きを認め、楽しさやおもしろさを共感する。 ・友達へのかかわり方を一緒になって考える。
5．力の発揮 ・固定遊具でがんばる ・友達に認められる安心感に浸る ・友達との共通の喜び	・幼児の必要に応じる ・お互いの個性や違いを分かり合えるような遊びの認め方 ・友達の動きを伝えたり共感する ・その場にあったタイミングのよい共感 ・試せるだけのたっぷりの時間、空間 ・幼児の変化を支え、一緒に楽しむ	・T男ができた喜びを共感。 ・友達の中にいることへのT男自身の喜びの確認と共感。 ・T男の認められるチャンスを生かす。 ・友達の中で遊びを見守る。 ・T男の相手の動きに合わせた動きを称賛する。

⇓ ⇓ ⇓ ⇓

6．新しい力の獲得	・新しい刺激の得られる目に見える環境 ・場や物の提示をしたり、再構成をする	・環境に変化を持たせてみる ・技術的なことへの経験の積み重ねの機会をつくる
7．生活の広がりと深まり	・時間のゆとりをもつ ・豊かに変化して行くことへの共感、励まし	・次のステップを提示し、共感的に見守る ・豊かに変化して行くことへの共感、励まし

T男の発達に応じる生活とは、保育者がT男をありのままに受け入れ、思いが実現できる生活を共に創っていったことである。T男に何ができるかではなく、以前に比べどうかという見方で継続的に見て行くと、行為や表情等から何を考え、何を表現しようとしているのかおおよそ捉えられるようになってきた。人とかかわる経験の不足をT男なりに獲得して行く過程において、T男は伸びやかな発達を示した。そこを基点に他の側面も発達が促され、T男らしい歩みで園生活を充実して送っている。

T男の発達を次のように確かめることができた。（おもに人とかかわる側面から）



Ⅵ　研究の成果と課題

1　成果

(1)　抽出児に視点を当て、幼児らしい行動の仕方や考え方、姿について継続的に見てきた。そのことから発達の道筋や、必要な経験が捉えられるようになり、一人一人の発達に応じる具体的な言葉かけや見通しを持って待つなどの援助の大切さがわかった。また、そのことは他の幼児についても言えることであり、温かい関心を寄せ、深く見ることの大切さ、一人一人の発達の特性に合わせることの大切さにつながった。

(2)　一人一人の発達を促す援助の工夫の第一歩は、しっかりとした保育の視点であり、保育者自身の構えであることを再確認した。そのために、絶えず「何が育ったのか」反省評価しながら記録することが大切である。記録は、個々の幼児の姿が見えて楽しいものであると同時に、自分の保育をみつめる厳しいものでもある。幼児の心の動きに応じる記録が大切であることが分かった。

(3)　発達は、幼児が自分の思いを実現したいという内面の目的感に支えられて促されていく。保育者は生活の状況を判断し、充実した生活を共に創って行くことが大切であることが分かった。幼児の思いは実現できないこともあるが、失敗は大人の言う失敗ではなく試行錯誤することの価値として捉え、発達に必要な経験として支えることも大切な援助であると捉えた。

(4)　一人一人の幼児の発達は、同年代の幼児や保育者が共に生活することによって促されている部分が多いことが分かった。温かい心のつながりのある集団の中で安心して自己を発揮することが一人一人の発達を促すことになる。保育者の役割は、信頼感でむすばれた温かい集団を育てることであり、心の動きを受け止めることであることを十分認識することができた。

2　今後の課題

(1)　生活の流れに添って一人一人の内面を深く捉える目を養い、翌日に活きる反省・評価の視点を明確にしたい。

(2)　幼稚園教育のねらいでもある心情・意欲・態度については、総合的に育つものではあるが、“良く遊んでいるから”とか、“良く活動している”として態度については見落とされている部分があった。今後は“態度”を視野に入れた研究が課題である。

(3)　幼児一人一人の発達を促し、充実した生活のためには保育者間の共通理解が重要になってくる。保育カンファレンス等、保育者集団として共に高まるための方策を探りたい。

〈主な参考文献〉

文部省	『幼稚園教育指導書増補版』	フレーベル館	1989年
〃	『幼稚園教育指導資料第4集　一人一人に応じる指導』	〃	1996年
〃	『幼稚園教育指導資料第4集、幼児理解と評価』	チャイルド本社	1993年
岸井勇雄、小林龍雄、高城義太郎、柳尾勲　編著	『幼児教育原理の研究』	〃	1993年
柴崎正行	『幼児の発達理解と援助』	〃	1994年
柴崎正行　編著	『保育方法の探求』	建帛社	1995年